NY エッセイ 59

中瀬有紀

Communication Breakdown

Hudson Yards Redevelopment Project

“Communication Breakdown, It's always the same, I'm having a nervous breakdown, Drive me insane！”と歌うのはイギリスのロックバンド、レッド・ツェッペリンです。1969年に発売された彼らのデビューアルバムに収録されていた『Communication Breakdown』というこの歌の中で、意思の伝達がうまくかなくてイライラする原因は「彼女」らしいですが、他者と意思疎通できないことによる葛藤と面倒は、常々人間社会の均衡を妨げる障害となっています。

1960年代と2010年代の通信技術を比べるとその発展は著しく、当時の移動体通信システムで新技術であった無線呼び出しサービス（ポケットベル）の短方向通信は衰退の流れを進め、インターネットなどの双方向通信が拡大の一途です。2014年1月現在、90%のアメリカ人成人が携帯電話を所有し、同年、世界のインターネット利用者数は30億人を超えました。こんなにも通信手段が増えたことによりコミュニケーションしやすくなったはずですが、一筋縄では行かないのが現実です。

舞台・テレビの照明業務における「Communication Breakdown」は死活問題でしょう。よくある例は、回路やアドレス番号の間違いや、指定した器材の種類やパイプの長さの発注ミス、最悪なのは器材の位置が全体的に大幅にずれて設置されすべてを仕込みなおす、また照明オペレーターが乗り込んで作業しているトラスを機構や装置担当者が知らずに昇降してしまうというような信じられない例です。解決可能な問題は時間が許す限り許容範囲と言えますが、そのような小さな情報交換ミスの積み重ねが人身事故のような大きな失敗に繋がりかねません。

それらの意思伝達の行き違いにはさまざまな理由が考えられます。たとえば、指示を注意して聞かない・見ないなどの注意不足、指示の間違いや不明確、指示する側とされる側の片方または双方の知識不足、人種、性別、年齢等に基づく差別的反感やエゴ、オフィスと現場の物理的な距離、ヒエラルキーが奪う発言の自由、また馴れ合いの関係にありがちな緊張感不足などです。それらを防ぐにはどうしたらいいのでしょうか。知りたい・伝えたい情報交換を一番早く確実に行うには、会って話すことです。どんなに見た目の美しい照明図面と、すべての情報を凝縮した資料が完璧に作成されても、それらが作業の手助けとして使用されなければ作成に費やされた時間と労力は全くの無駄でしょう。それらの紙媒体を用いて作業工程とデザインの目指すものを共通認識することで初めてその資料を作成する意味が生まれます。

レッド・ツェッペリンの『Communication Breakdown』のように、カップルに限らず人間間の以心伝心は、すべての社会活動の基礎であり、お互いにわかろうとする歩み寄りがビジネスの成功のみならず人生の幸福感と直結しているように感じます。照明業務を全うしプロジェクトの成功と関わる人皆が「やってよかった」と思える仕事にするには、どんなにも時間がなくとも、面と向かって打合せをし、一つひとつ目の前で一緒に確認するのが一番の近道だと痛感します。「急がば回れ」と言うように、今後さらに通信技術が発展しそれらを有効利用しつつも、目を見て話し合うことが「Communication Breakdown」を防ぐ唯一の方法でしょう。